

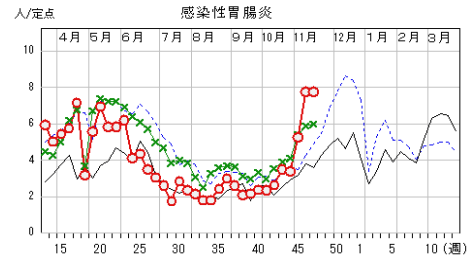
長崎県感染症発生動向調査速報(週報)

平成30年第47週 平成30年11月19日(月)～平成30年11月25日(日)

☆定点報告疾患(定点当たり報告数の上位3疾患)の発生状況

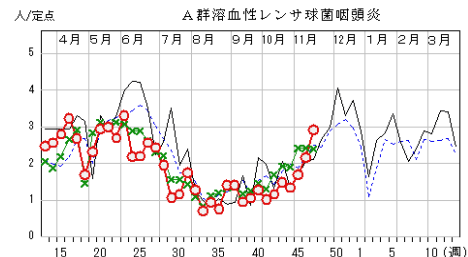
(1) 感染性胃腸炎

第47週の報告数は前週と変わらず342人で、定点当たりの報告数は7.77であった。
年齢別では、1歳(59人)、2歳(49人)、3歳(43人)の順に多かった。
定点当たり報告数の多い保健所は、県北保健所(16.00)、佐世保市保健所(15.67)、県央保健所(13.33)であった。



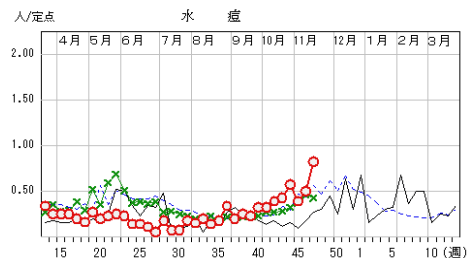
(2) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第47週の報告数は128人で、前週より33人多く、定点当たりの報告数は2.91であった。
年齢別では、5歳(20人)、4歳(18人)、3歳(15人)の順に多かった。
定点当たり報告数の多い保健所は、県央保健所(8.67)、佐世保市保健所(4.00)、県南保健所(3.80)であった。



(3) 水痘

第47週の報告数は36人で、前週より14人多く、定点当たりの報告数は0.82であった。
年齢別では、5歳(8人)、4歳(5人)、6歳(5人)の順に多かった。
報告の多い保健所は、県南保健所(2.60)であった。



○ 当年(長崎県) 前年(長崎県)
× 当年(全国) 前年(全国)

☆上位3疾患の概要

【感染性胃腸炎】

第47週の報告数は、前週と変わらず342人で、定点当たりの報告数は7.77でした。地区別にみると、壱岐地区、対馬地区以外から報告があがっており、県北地区(16.00)、佐世保地区(15.67)、県央地区(13.33)の定点当たり報告数は、他の地区より多い状況で、今後の動向に注意が必要です。

本疾患は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。原因はノロウイルスをはじめとするカリシウイルスやロタウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に乳幼児には、手洗いの励行とともに、体調管理に注意して感染防止に努め、早めに医療機関を受診させましょう。

【A群溶血性レンサ球菌咽頭炎】

第47週の報告数は、前週より33人増加して128人となり、定点当たりの報告数は2.91でした。地区別にみると、壱岐地区、対馬地区以外から報告があがっており、県央地区(8.67)、佐世保地区(4.00)、県南地区(3.80)の定点当たり報告数は、他の地区より多い状況で、特に県央地区は警報レベルの基準値(8.0)を超えており、今後の動向に注意が必要です。

本疾患の好発年齢は5歳から15歳で、鼻汁、唾液中のA群溶血性レンサ球菌を含む飛沫などによってヒトからヒトへ感染します。また、食品を介しての経口感染もあります。潜伏期間は約1日から4日で、突然の発熱(高熱)、咽頭痛、全身倦怠感、時に皮疹もあります。急性期患者の感染力は強いですが、適切な抗菌薬の投与により、多くは1日から2日後には症状も消失し、感染力も著しく低下します。不十分な治療は無症状保菌者を生じやすいため、早めに医療機関を受診するとともに、手洗いやうがいを励行し、感染防止に努めましょう。

【水痘】

第47週の報告数は、前週より14人増加して36人となり、定点当たりの報告数は、0.82でした。地区別にみると、県南地区(2.60)の定点当たり報告数は、警報レベルの基準値(2.0)を超えており、今後の動向に注意が必要です。

本疾患は、例年冬場に患者数が増加する傾向にありますので、今後の動向に注視していく必要があります。水痘は水疱瘡(みずぼうそう)とも呼ばれ、原因となる水痘帯状疱疹ウイルスは伝播力が強く、ウイルスを含む飛沫あるいは飛沫核を経気道的に吸入することによる飛沫感染、あるいは水疱の内容液と触れることによる接触感染により感染が成立します。手洗いの励行、体調管理に心がけ感染防止に努めましょう。

★トピックス：風しんに注意しましょう

風しんは、せきやくしゃみなどの飛沫から感染し、通常は発疹や発熱が起こりますが軽微な症状で経過し重篤化することはほとんどありません。しかしながら妊娠初期に感染すると、胎盤を経て胎児にも感染し、先天性の心疾患や難聴、白内障など(先天性風しん症候群：CRS)を引き起こす危険性がある恐ろしい感染症でもあります。

風しんやCRSは予防接種により予防可能ですが、妊婦へのワクチン接種は禁忌であるため、妊婦または妊娠する可能性の高い方に伝播させることのないよう、周囲の身近な人は医師と十分相談の上、抗体検査やワクチン接種を実施することが重要です。

本県では、11月21日に長崎市地域保健課から風しん患者発生ของプレスリリースが発表されました。関東地方を中心に全国では風しんの報告数が例年と比べて大幅に増加しております。30代から50代の男性においては、風しんの抗体価が低い方が2割程度存在していることが分かっています。風しんワクチンの接種対象が1994年まで中学生の女子に限られたため、この年齢層には免疫がない男性が多数存在していることが今回の流行に大きく影響しているようです。今後の風しんの動向に十分注意しましょう。

(参考) 厚生労働省 風しんについて (外部のページに移動します。)

https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou/rubella/

★トピックス：インフルエンザを予防しましょう

インフルエンザの全国的な流行は、例年11月下旬から12月上旬頃に始まり、年が明けて1月から3月頃にピークを迎えます。本県では、1月から本格的な流行が始まり、以後患者数が急増して2月初旬から中旬にかけてピークに達する傾向にあります。昨シーズンは、11月末頃から患者数が増加し、例年より早く流行入りしました。

今シーズンは患者数の増加はまだ認められていませんが、早めの対策が必要です。予防には、ワクチン接種と「咳エチケット」の徹底などの積極的な感染予防策が有効です。ワクチンは接種すればインフルエンザに絶対にかからないというものではありませんが、発症及び重症化を一定程度予防する効果があります。ワクチンの予防効果が期待できるのは、接種した（13歳未満の場合は2回接種した）2週間から5か月程度までと考えられています。10月から接種可能となっていますので、流行に備えてワクチンを接種しておくことが望ましいです。

～ 咳エチケット ～

- ・マスクの着用（咳をしている人には着用を促す）
- ・マスクのない場合は、口と鼻をティッシュなどで押さえる
- ・人に向けて咳やくしゃみをしない
- ・使用したティッシュは、すぐにゴミ箱へ捨てる
- ・咳やくしゃみを受け止めた手は、すぐに洗う

など、感染拡大を防ぐための「咳をするときのマナー」です。

(参考)厚生労働省 インフルエンザ総合ページ(外部のページに移動します。)
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/kekkaku-kansenshou/infuenza/index.html

★トピックス：梅毒の報告数が増加しています

梅毒は梅毒トレポネーマの感染によって生じる性感染症で、感染者との粘膜の接触を伴う性行為感染や妊婦の胎盤を通じて胎児に感染する（先天梅毒）経路があります。

感染後3～6週間の潜伏期を経て、初期には感染部位の病変（初期硬結、リンパ節腫脹等）、続いて血行性に全身へ移行して皮膚病変（バラ疹や梅毒疹等）や発熱、倦怠感等の多彩な症状を呈するようになります。無治療の場合、感染から数年～数十年経過すると心血管梅毒、神経梅毒に進展します。症状が出ない無症候性梅毒の状態で、永年にわたり気がつかないまま過すケースもあります。先天梅毒では、乳幼児期に皮膚病変や全身性リンパ節腫脹等を呈する症例や学童期以後に実質性角膜炎、内耳性難聴、Hutchinson 歯などを呈する症例があります。

2010年以降梅毒の報告数は全国的に増加傾向にあり、長崎県における2018年第47週現在の報告数は39名（患者32名、無症状病原体保有者7名）で、過去に報告数の多かった2014年、2015年の19名を上回って感染症発生動向調査を始めた1999年以降で最多となり、現在も増加しています。

梅毒は早期に診断ができれば治療は比較的容易とされていますが、診断の遅れから神経梅毒などを発症し後遺症が残ることも稀ではありません。早期に治療を始めることが重要ですので、感染が疑われる症状がみられた場合には、早期に医療機関を受診しましょう。また、感染を予防するには、コンドームを適切に使用することや感染のリスクとなる不特定多数の人との性的接触を避けることが重要です。

(参考)国立感染症研究所 梅毒(外部のページに移動します)
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ha/syphilis.html>

